



**ベートーヴェンがこよなく愛したフォルテピアノ**  
～今回使用する “ナネット・シュトライヒャー”(ウィーン、1818 年製)について～

渡邊 順生

2002 年 5 月のある日、デパートで買い物をしていると携帯電話が鳴った。その時、もしこの電話に気がついていなかったら、今回のコンサートもなかったかも知れない。というのは、電話の主はオーストリアに住む知人で、ナネット・シュトライヒャーの 1818 年製のピアノが売りに出た、という話だったからである。

かつて私は、ヨーロッパでチェンバロやフォルテピアノなどの歴史的鍵盤楽器を研究するうちに、1810 年頃から 25 年頃までのウィーンのピアノには、魅力的な楽器がおよそ少ないことに気がついた。18 世紀の終わりから 19 世紀の初めにかけての南ドイツ／ウィーンのピアノは、いわゆる玉を転がすような軽快な音と弱音の表現力に特徴とし、このタイプにはシュタインやヴァルターをはじめとする名器が目白押しだ。

ところが、それに続く時代になると、ウィーンのピアノ製作家たちは力強いフォルテと繊細なピアノの両方を追い求めるようになるのだが、ほとんどの製作家が「二兎を追う」ことに失敗した、あるいは十分な成果を上げられなかったのである。

そうした中で、ナネッテ・シュトライヒャーのピアノは断然光り輝いていた。  
私は、シュトゥットガルトやハレ、バーゼルなどの楽器博物館でこの時期のシュトライヒャーのピアノを試奏したが、ベートーヴェンがぞっこん惚れ込んだのもむべなるかな、どれも「窮極のフォルテピアノ」とも言うべき名器であった。

しかし、シュトライヒャーのピアノは、博物館には数多く並んではいても個人蔵のものは少なく、最近の取引例などは聞いたこともない、入手するのはほとんど不可能と諦めていた。

そこへ、この電話である。聞けば新発見の楽器で、状態も良好と云う。私が何と答えたかはご想像におまかせしよう。

ナネッテ・シュトライヒャーは、1777年にモーツァルトが絶賛した南ドイツのピアノ製作家シュタインの娘であった。この時、彼女はまだ8歳、ピアノを達者に弾く愛らしい少女として、この時のモーツァルトの手紙に登場する。

彼女の結婚相手となったヨハン・アンドレアス・シュトライヒャーは、ドイツの「疾風怒濤運動」を担った詩人で、ピアノ奏者でもあった。彼はシュトゥットガルトの出身でシラーの友人でもあり、放浪時代のシラーを経済的に援助した。後年はベートーヴェンのために補聴器を作るなど、妻と共にこの不世出の楽聖の後半生を支える重要な友人となった。

ナネッテは1792年に父が死ぬと弟と共に工房を切り盛りしていたが、94年に結婚してウィーンへ出、短期間のうちにウィーンでも最も重要な製作家として不動の地位を築く。

1803年、フランスのエラールからピアノを贈られたベートーヴェンは、その力強いフォルテに大喜びしたものの、重いタッチと弱音が出ないことに辟易し、不満足な部分の改良をシュトライヒャー夫妻に依頼する。シュトライヒャーの工房ではエラールのピアノと大格闘した模様だが、結局出来ないことは出来ない相談なのであった。

しかし、この仕事を通じて、シュトライヒャー夫妻とベートーヴェンの相互理解は大いに深まったらしい。彼女は、1809年、新しいモデルを開発してベートーヴェンの要求に応える。この新型のピアノは、ベートーヴェンの考えや要求を大幅に採り入れたという点で、広い意味で「ベートーヴェンとの共同開発」と言っても良い楽器であった。シュトライヒャーは、1820年まで、基本的にモデル・チェンジをせずにこのタイプのピアノを作り続けた。



＊第12回「くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート」（2008年11月9日）  
『渡邊順生／モーツァルト&ベートーヴェン』のプログラムより転載